

いくさの鉄のにほひ

牧師 山本 護

「八月は六日九日十五日」と詠まれるほど、日本の8月には戦争の記憶がくっきり刻まれている。この季節、私にとっての戦争イメージは、遠耳に聞こえてくる甲子園野球のラジオ放送と隣り合っています。

一昨年夏、坊主頭ではない慶応高校が辛勝した日、熟れた大きな桃をいただいた。気まぐれから皮を指先で剥き、かぶりついてみると案の定。汁がしたたり手と顔中がベトベトになりました。その時の駄句、「桃喰へばいくさの鉄がにほひけり」。



甘さの中のピリリとした不快に、まるで知りもしない一兵卒の鉄兜や銃身の匂いが想起されるとは奇妙。経験から辿れる記憶は、鉄棒で遊んだ後の掌の匂い。地面が砂場になっている小学校の鉄棒で蹴あがりの習得に熱中し、柔らかい掌に「いくさの鉄」が浸み込んで消えないのでしょうか。

「お前たちの鋤を剣に、鎌を槍に打ち直せ。弱い者も、わたしは勇士だと言え(ヨエル 4:10)」。

えっ、そうなの、とこの預言をいぶかしむかもしれません。キリスト教界限でよく引用される聖句は「彼らは剣を撃ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない(イザヤ 2:4、ミカ 4:3)」という平和の宣言ですから。

平時には「剣を鋤に打ち直す」が、有事には「鋤を剣に打ち直す」という意味なのでしょうか。いや「鋤を剣に、鎌を槍に」とは戦争の準備ではない。預言の文脈は「主の日が裁きの谷に近づく。太陽も月も暗くなり、星もその光を失う(ヨエル 4:14~15)」。すなわち「終りの日」を迎えると、貧弱な民も蹂躪されることはない。だから堂々と「弱い者も、わたしは勇士だと言え(ヨエル 4:10)」。鋤と鎌の打ち直しは終りの日の徴です。

「桃喰へばいくさの鉄がにほひけり」。熟した桃で直観した鉄兜や銃身という「いくさの鉄」、幻想の匂い。ではなぜ、こんな一句がほろりと零れ落ちたのか。冷戦後、西側の新自由主義で安定していた世界秩序が崩壊し始め、「剣と槍、鋤と鎌」が打ち直されている潮流の中にいるからでしょうか。

変わりゆく秩序と価値基準の転換。揺れて定まらない時代だから、真逆に響く二つの預言を現実として柔らかに迎えたい。また三番目の項としてイエスの言葉も加えておきましょう。「戦争とか暴動のことを聞いても、おびえてはならない。こういうことがまず起るに決まっているが、世の終わりはすぐには来ないからである(ルカ 21:9)」。Ω